20240120　朝礼拝　ヤコブの手紙３章１〜11節

「はい、ごめんなさい」

一般的に、牧師は神様の召しに応えて、この職に就いていると言われています。牧師は、誰であれ召命感というものを持っている、はずです。神様によって、自分の命を召し上げられている感覚であり、自覚ですね。「命を召し上げらえる」と言うと、命を奪われているような印象もありますが、言い換えるなら、「率先して人生を神様に委ねている」ということですね。神様の召しに答えて、そして、自分の人生を神様に委ねている人。それが牧師の一つの側面であると言えます。もちろん、「牧師とは、何か？」と問われれば、色々な語り方ができますが。

ところで、この「召し」とか「召命」という言葉は、英語では「calling」と言います。コーリング。呼び出すという意味ですね。そして、この英語の「calling」には、「天職」という意味もあります。日本語における「天職」には、楽しくて、充実して、その職に巡り合うことができて幸せだ、というような意味が含まれてきますが、英語の「calling」という言葉には、そういう幸せな雰囲気はありません。それは、良くも悪くも、神様からの呼び出しであり、神様から与えられた職務である、ということです。その仕事が自分に合っているとか、楽しいとか、好きとか、そういう人間側の都合は、全く考慮に入っていません。

そういう意味では、召命を受けて、神様から呼び出されて牧師をしている人たちは、極論、好きで牧師をやっているとは限らない、ということです。もちろん、牧師と言う仕事に無上の喜びを見出している人もいるかも知れませんが、多分、そんなに多くはないと思いますし、それに、個人的には、あまり牧師と言う立場に満足したり、固執したりする人というのは、ちょっと危うさを持っているように思います。牧師は、主の十字架を負うことを誰よりも強いられる立場なわけですから、

イエス様だって「この杯を取り去ってください」と言うくらいの苦しみがあるわけですから、それって、全然楽しくも、面白くもないですよね。牧師として召された、神様に呼び出された。だから、仕方ない、やるしかない。というくらいの受け止めが、個人的にはちょうど良いような気がします。

もう5年くらい前です。名古屋中央教会で行われた按手礼式に出席しました。名古屋中央教会で伝道師をしていた友人の按手礼式です。私も、大勢の牧師に交じって、その友人の肩に手を置き、神様の召しに応えることを受け入れた友人のために祈りました。ちなみに、按手礼式の全体の雰囲気としては、祝福と喜びの割合の方が多いです。決して「そっか、とうとうお前も牧師になってしまうんだな」というような悲壮感はありません。新しい牧師が立てられることを、本人も、信徒も、牧師仲間も全員喜んでいました。ただ、名古屋中央教会の主任牧師、つまり、按手礼を受けた友人の上司ですね。この上司の先生は、もちろん、祝福の言葉を語りましたが、こんな言葉も贈っていました。「ここに集まっている牧師先生たちは、よく分かっていると思いますけど、牧師って本当に罪深いものです。あなたには、そのことを忘れないで欲しいと思います。そして、その罪深さを共に担ってくださるイエス様を頼って、どうか大切な職務を担って欲しいと願っています」。この上司の先生が、牧師のどの部分を指して、「本当に罪深い」と言ったかは、よく分かりません。が、私も「はい、ごめんなさい」という気持ちにさせられました。講壇の上で主の御言葉を取り次ぐことをしているにも関わらず、「先生」と呼ばれる立場にあるにも関わらず、法律的にも代表責任役員をしているにも関わらず、と、色々な切り口から「ごめんなさい」と言いたくなることは多々あります。

特に、今回の聖書箇所に書いてあることは、本当に耳に痛いことです。1節にある「わたしの兄弟たち、あなたたがたのうち多くの人が教師になってはなりません」という御言葉は、決して教師の崇高さ、偉大さ、賢さを念頭において語られているわけではありません。そうではなくて、「教

師がほかの人たちより厳しい裁きを受けることになる」からです。それは、社会的にもそうですね。「先生」と呼ばれる人が、ひとたび不祥事を起こせば、途端に壮絶な社会的制裁を受けることになります。また、こと牧師に関して言えば、霊的にも厳しい裁きを受けることになる、と言えるでしょう。牧師の過ちは、教会員を傷付けることになり、また、教会の外に対しても、キリストの栄光を見えづらくすることになります。しかも、それは非常に簡単に、そうなってしまいます。

牧師の舌は、本当に「火」であると言えます。そして、どんな牧師も、自分の舌を完璧に制御できる、なんてことは無理だと思います。いや、どこかには「自分の舌を完璧に制御できる牧師」がいるかも知れませんが、でも牧師も人間ですから、間違うことを通常避けられません。

ご葬儀で、故人の名前を言い間違い続けた牧師先生がいらっしゃいました。そして、その大失敗談を「おまえの為やで」と後輩である私に教えてくれました。ここ敦賀教会とも関係の深い、同信伝道会の西澤他喜衛先生もこう仰いました。「やっぱり、僕の失敗のほとんどは、言葉の選び間違いでした」と。私自身、人や子どもの名前が出てこないとか、不適切な発言をするとか、あるいは、言うべき言葉を言い忘れるとか、やっぱり「舌」に関係する過ちを重ねています。召命を受けて、牧師という仕事をする上では、どうしても「舌」をフル稼働させて、語らないといけない、話さないといけない。でも、その「舌」はよくよく罪を犯すものであり、過ちから逃れられないものでもあります。今日の聖書箇所は、少なくとも私にとっては、本当に「はい、ごめんなさい」と懺悔するしかない御言葉の連続です。「御覧なさい。どんな小さな火でも、大きな森を燃やしてしまう。舌は火です。舌は「不義の世界」です」。本当にその通りだと思います。

「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れをしらない悪で、死をもたらす毒に満ちています」。このヤコブの手紙を書いた人は、言葉によってひどく傷つけられた経験があるのか、あるいは、誰かを死に追いやる程に傷つけたことがあるのか。または、そんな言葉による暴力の現場に

遭遇したことがあるのかも知れません。今も、昔も、「舌禍」ということは消えません。「舌禍」。舌の禍です。コロナ禍は、とりあえず過ぎて行きそうですが、舌禍は、おそらく人間が言葉を操るようになって以来、ずっと留まり続けています。

舌禍の原因は、人の悪意や無知に由来することが多いと言えます。わざと傷付ける言葉を選ぶ、とか、何も知らずに無邪気に不適切な言葉を使う、とかですね。一方で、私たちの日常において最もあり得るのは、「誤解」による舌禍ではないでしょうか。「ちゃんと伝えたつもりなのに」「そんなつもりで言ったんじゃないのに」。言葉に入り込む毒と言うのは、明確な悪意や無知だけとは限りません。「言葉足らず」「説明不足」「分かってもらえるという思い込み」「分かったつもりでいるという思い込み」。これらは強烈な毒ではありませんが、日々の積み重ね中で、大きな痛みとして蓄積していくことがあります。

基本的に、私たちの語る言葉は、欠陥を含んでいるものです。私たちは、心や頭に思い浮かぶ感情や気持ちを、言葉にして語ります。けれど、その伝えたい「感情や気持ち」は、言葉になった時点で、そのもともとあった複雑で繊細な機微は失われてしまっています。「大丈夫ですか？」と聞かれて、「はい、大丈夫です」と答えるとしても、この「大丈夫です」という返答の後ろには、いったい、どれだけの含みがあるのか、ということです。「今朝から足が痛いけど、歩けない程じゃないから、まぁ、大丈夫」なのかも知れないし、「大丈夫って、とりあえず言っておかないと、相手に心配かけるし、まぁ、大丈夫」なのかも知れないし、「全然、大丈夫じゃないけど、弱ってると思われたくないから、まぁ、大丈夫」なのかも知れないし。そして、「大丈夫です」と言い続ける中で、「本当は、大丈夫じゃないのに、なんで気が付いてくれないの」という感情に発展することもあるかも知れないわけで。その鬱憤が、いつの日か、累積した毒として、人と人の関係性に影を落とすこともある、かも知れません。

「私たちは、舌で、父である主を賛美し、また、舌で神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです」。この御言葉も耳が痛い程に辛辣であり、また、否定できない程に真実です。私たちは、祈る時には、時に原稿を用意してまで、最大限の注意を払って賛美の言葉を選びます。だって、それは神様に向けた言葉なのだから、失礼があってはなりません。しかし、その最大限の注意を乗せることのできる舌で、私たちは不注意にも、隣人を傷付けたり、呪ったり、貶めたりすることがあります。

神様はご存じなのです。ご自身に向けられた賛美の言葉が、どんな口から出たのか。どんな舌によって述べられたのか。神様は、御自身に向けられる祈りの言葉の、その源流の清らかさ、あるいは、汚さを、すべてご存じなのです。

だから、私たちは、神様に祈る時だけでなく、隣人に語る時も言葉を丁寧に選ばないといけません。神様が望まれ、イエス様が命を懸けた、全き平和を実現するために、私たちは、まず自らの語る言葉を「苦い水」にしないように、注意しないといけません。それは、とても難しいことです。不可能に近いことです。私も、罪深い側の一人として、「そんなの無理ですよ」って言いたい。でも、大事なことです。隣人を活かす言葉を語るのは大事なことです。隣人の気持ちに寄り添って語るのは、平和の始まりです。

ヨハネによる福音書の始まりで、「言は神と共にあった。言は神であった」と書かれているのは、特別に神秘的なお話ではありません。神様の似姿である私たちの語る言葉にも、愛が宿り、大きな力が伴うのです。そのことを、古い信仰者たちは知っていました。言葉って大事だなって。言葉って丁寧に使わないとダメなんだなって。だから、私たちは、こうやって「御言葉による礼拝」を続けているとも言えます。礼拝堂に華美な装飾をせず、興奮を引き起こす音楽を用いず、ただ静かに御言葉に耳を傾ける。そんな礼拝を私たちは続けています。言葉は大事です。人を傷付ける諸刃の

剣にも成りえる言葉に、神様の愛が宿り、イエス様の慈しみが伴うと信じて。私たちは、言葉を大切にする信仰を続けています。

ただ、残念ながら、時には、言い間違えます。要らないことを言ってしまいます。言葉で人を傷付けることがあります。どんなに注意を重ねても、時に言葉には悪が宿り、毒が生じます。しかし、もし、そんな残念なことになったら、私たちは特別な言葉を、過ちを繰り返す、この「舌」に乗せたいと思います。「ごめんなさい」って。苦い水を吐き出した泉に、もう一度、甘い水を取り戻すために、私たちは懺悔し、「ごめんなさい」と隣人と神様に伝えるのです。もう一度、愛を伝える言葉を語れるように、「ごめんなさい」って言うんです、きっと。

「ごめんなさい」の一言で、取り返しのつく失敗は、そう多くはないでしょう。「ごめんで済んだら、警察は要らん」ということも、また真実でしょう。でも、その真実が「ごめんなさい」を言わなくていい理由にはなりません。神様に対する祈りの中で、自分の過ちを認めて懺悔できる私たちは、隣人に対してもちゃんと懺悔した方が、多分良いんだと思います。過ちを犯すことを認め、不完全であることを受け入れる私たちは、この口と舌で、神様に対しても、隣人に対しても、同じことを伝えるのです。「今日も、支えてくれて、ありがとう。今日も、色々マズかったけど、ごめんなさい、っていうか、そんな私を許してくれて、やっぱり、ありがとう」と。

舌を完璧に制御できないけれど、でも、神様の愛と赦しを信じて感謝できる私たちがいます。そんな私たちから始まる平和な世界の実現を祈り求めて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちを、こうして礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。時にイラ立ち、時に鋭い言葉を口にすることもある、私たちを、今日も礼拝に招いて下さることで、あなたは赦してくださいました。舌を制御することは、本当に難しく、この口を清らかに保つことは簡単ではありません。けれど、あなたは、私たちに御声を掛けてくださり、恵みと祝福をくださいます。あなたに

赦されて生きる幸いを、心から感謝致します。どうか、神様、私たちに平和を創り出す言葉をお与えください。隣人を愛し、喜びで満たせるための言葉を教えてください。あなたを賛美するように、隣人を尊び、そして、平和で穏やかな日々を実現することができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。